

2024年3月

『2023年度 私の一冊』

◆◆◆ 3月の読書会から

3月は参加者それぞれが選んだ一冊を発表し共有します。今回もいろいろな本が紹介され、どうしてそれを選んだか、どう感じたかなどを話しました。

同じ本を選んだ人、これから読もうと思った本を選んだ参加者もいました。読書会では毎月課題本として決まった本を読んでいます、自由に選ぶのもまたいいものです。自分では選ばない本と出会えた人もいたと思います。

(文責：森下)

	著書名	著者	出版社	発行
【吉川五百枝】	『生きている不思議を見つめて』	中村 桂子	藤原書店	2021
【 YA 】	『日本百名山』	深田 久弥	朝日新聞社	1982
【 TK 】	『来て！見て！感じて！』	鎌田 敏夫	海竜社	2013
【 JM 】	『モンテレージョ小さな村の旅する本屋の物語』	内田 洋子	方丈社	2018
【佐村蘭子】	『優しさという階段』	灰谷 健次郎	理論社	1986
【伊達悦子】	『おおかみ王ロボ』 集団読書テキスト	E.T.シートン	全国学校 図書館協議会	1967
	『あべ弘士のシートン動物記 1』	E.T.シートン原作 あべ弘士・絵	学研プラス	2020
	『シートンどうぶつ記 オオカミ王ロボ』	今泉忠明 監修	金の星社	2000
	『少年少女シートン動物記 1』	E.T.シートン／著 白木 茂／訳	偕成社	1982
【 T 】	『川のほとりに立つ者は』	寺地 はるな	双葉社	2022
【 N2 】	『一〇三歳になってわかったこと』	篠田 桃紅	幻冬舎	2015
【 KH 】	『香君 上・下』	上橋 奈穂子	文芸春秋	2022

	著書名	著者	出版社	発行
【 K子 】	『小説伊勢物語 業平』	高樹 のぶ子	日経BP日本経済新聞出版本部	2020
【 SM 】	『小説伊勢物語 業平』	高樹 のぶ子	日経BP日本経済新聞出版本部	2020
【望月悦子】	『はみだしの人類学』	松村 圭一郎	NHK出版	2020
【 MM 】	『本屋で待つ』	佐藤 友則 島田 潤一郎	夏葉社	2022

竹原読書会 2024年3月 今年の1冊
『生きている不思議を見つめて』(中村桂子 2021 藤原書店)

吉川五百枝

今年3月26日に、著者の中村桂子さんが河内町に来られます。

もちろん参加する予定ですが、何を愉しみにして会おうとするのかな？と考えなくもないのです。ずっと何十年間か、著作を読んできましたし、文字での内容はそれなりに頷いて受け止められます。でも、活字と違うのは、文のイントネーションの上下や、口調や表情、眼差し、お話の速さ、などでしょうか。

それらを感じ取ることが出来るのは、お互いが目の前で生きているからこそです。日頃は意識しないけれど、諸行無常の中で生きている自分を、ふっと意識する。著者の目は、生物学者の冷静な目と「愛づる」と言われる人間らしい目との両方をない交ぜにして「生きる」ことを語られる生命誌の世界です。

この本は、科学的な研究とあわせて、“不思議”という非科学的な言葉を使われる著者の特徴を著した本だと思います。

そして中村桂子さんの著作に触れると必ず「もう一人の桂子さん」のことが浮かんでくるのです。

二人で一体のように浮かんでくる「柳澤桂子さん」。2年違いで生まれた二人は同じ自然科学の道に進み、同じ三菱化成生命科学研究所で研究をされていました。世に「二人桂子」といわれた才媛どうしですが、柳原さんは31才の頃から原因不明、治療法不明の病気になられ、研究生活は遠のき苦痛からベッド上で死と隣り合わせの命を何十年も生きてこられました。その心の波は、いかばかりであったろうかと思えます。ベッドから発せられた命の有様が、何冊もの著作として(今回は『癒やされて生きる』1998 岩波書店を 紹介します)出版されています。

生きる故に持つことになる苦です。東京から講演に来てくださる中村桂子さんをお迎えしながら、両極端とも言えるようお二人をお一人と見立てて、限りなく広い命の世界として見つめたいと思います。

◆ 【 YA 】 『日本百名山』

山や自然が好きだった。中国地方には登山に適した山が沢山ある。下の子が 5 才の時、大山に登った事がちよびり自信になった。深田久弥の[百名山]を知り彼が実際に登頂した山の喜びを語っていた。日本は山国で、何処からでも山を臨む事が出来る。かれの百名山の選考基準は第一に凡常な山は採らない、厳しさ強さ美しさか何か人を打って来るもの、次に歴史ある山、第3に個性のある山とある。付加条件として標高が千五百メートル以上。山はその土地で信仰の対象になったり校歌の歌詞になっている。

富士山と槍ヶ岳は日本の山を代表する 2 つのタイプだ。一つは山の裾の広がりがあるピラミッドで富士型、他の一つは先鋭的な鉾で天を突く槍型とある。日本全国に(何々富士)や(何々槍)という山が沢山ある訳だ。

日本の著名な山の写真集を 2 種類手に入れ、槍ヶ岳の天を突く姿に感動した。この頂きに立って見たいと思った。日本で 3 千メートル以上ある山は 14 だ。久弥の雪溪の紹介で、娘が 9 才の時白馬岳に登った。日本三大雪溪と呼ばれる雪の上を初めてアイゼンを着けて三千メートル近いのを登りきった。これで槍への挑戦がみえた。

別の山行で八方尾根から見た白馬三山の姿は久弥が述べていたように、真っ白い頂を抱いて本当に美しかった。

夢だった槍は娘が小学校 5 年の時、思い切って決行した。2 泊3日の槍への縦走途中の 1 泊目のヒュッテに着いて直ぐに、凄惨な稲光と雷雨で身がすくんだ。高い山は遅くとも午後 3 時までには入ることの怖さを体験した。1 日 9 時間弱の歩きは辛いが槍の山荘に着いて荷物を置き、槍の穂先に登った。頂上寸前で岩が割れている所を渡るときは怖かった。娘を気遣う余裕は無かった。しかし娘はしっかり頂上に立った。

山荘の前で貴重なブロッケン現象が現れた。幾つかの気象条件が揃わないと起きないらしい。前方上の方を眺めると、私の姿が大きく大きくぼくと見えた。福山山岳会の方に教えて貰った。

下りは槍沢を暗い内から降り始め、8 時間かかって上高地に着いた時はみんなでバンザイと静かに叫んだ。ホテルに入ると、みんな足が吊って、下りの階段が歩けず凄惨な格好だった。子供と一緒に登山は娘が中学 3 年で富士山に次ぐ第2の高峰北岳で終わった。北岳、間ノ岳、農鳥岳と 3 千メートル級が並び、白峰三山と呼ばれる。久弥は[北に遠ざかりて雪白き山あり]と一番北にある北岳を臨んではよく口ずさんだ。北岳は裾広がり長い行程距離で、体力を消耗した。下っても下っても麓に着く気配が無かった思い出がある。

久弥の百名山で、夫婦だけで登ったのは難易度も高さも 3 位の奥穂高岳で、これが最後となった。久弥の紹介では奥穂高岳では著名な登山家が亡くなっており、男らしく厳しい山ではあるがしかし美しいと述べている。その事を経験した。奥穂高岳の山荘が少し見えて来た最後の傾斜のきついザイテングラートで、私の後ろを来る夫が離れている。見ると顔色も悪く、足が上がっていない。これは高山病だと直感した。這いながらやっとこさで山荘に着き診療所に向かった。昭和大学の医学部が夏の間だけ駐留している。と言うことは高山病に罹る人が結構いるんだと。矢張診断は高山病だ。初めて人が高山病に罹る過程を見たのは初めて

だった。翌日は前穂高岳に登って足場の悪い岳沢を下って、8 時間の行程だったが、医者曰く[高さが段段低く成っていけば、大丈夫ですよ]と。上高地までやっと下りた時、夫に向かって言った。[ダメだねー]

久弥が登った百名山に出合わなかったら、高山には登っていないし、興味も湧かなかったと思う。百名山を読んで、私としては、沢山の山に登った。緊張も怖い目もしたが、今となっては楽しい思い出だ。

高い青い空。夜に見る降るような星の数々、美しい高山の花、雷鳥、可愛いオコジョ等、山の素晴らしさや厳しさを沢山体験した。時々山岳写真集や久弥の百名山を引っ張り出しては、眺めている。

◆ 【 TK 】 『来て！見て！感じて！』

テレビのドラマを見て感動するも、脚本家はいったい何を感じてなにを描こうとしたのか知りたくてこの本を読んでみることにしました。

いろんなドラマのロケ地を調べたり、俳優さんの言葉を調べたりしていました。そして女優のいとこさんにも話を聞いたりしてみました。でも脚本家の気持ちもが一番核心に触れることができたのでした。

人間には割りきれない感情、気持ち、感じ方があるのでそれらが正しいとか悪いとかだけで片付けるのは宗教になってしまふ。鎌田敏夫さんは、そんなことより、割りきれない思い、切ない思いをドラマの中に ドラマのセリフで描いています。

両親の不仲で両方を行ったり来たり生活だったので男女の思いを色々理解しようとしたりしたのかもしれない。

日常の会話ですぐ断定したり正邪を言おうとするのではなく、まず相手の状況とか感情とか気持ちを知らうと努めて共感できることは共感するのが最初の一步だと思います。人間として生きていくのに人との繋がりにはまずこれが大切だと思いました。

◆ 【 JM 】 『モンテレッジョ 小さな村の旅する本屋の物語』

迷いに迷って選んだのが「モンテレッジョ 小さな村の旅する本屋の物語」(内田洋子 方丈社)である。

中国新聞の読書欄で見かけ、図書館にリクエストした。

表紙には、右手に本を持ち、左手のカゴにはいっぱいの本、ポケットにも本・・・という男の石のレリーフらしきものの絵がある。さぞ重たかろう。なぜ、重たい本なのか、軽いものの方がよかろうに・・・と読み始めた。

筆者の内田洋子さんはイタリア在住のジャーナリスト、「ジーノの家 イタリア 10 景」で 2011 年に日本エッセイストクラブ賞を受賞している。内田さんはヴェネツィアの古書店で店主から、モンテレッジョの出身であること、本屋にはモンテレッジョ出身者が多いことを聞く。モン

テレヅジョはトスカーナの山の中にあり、たいそう不便な所らしい。

そこはどんな所なのか、紙の生産地なのか、印刷所があるのか、想像をめぐらしながらモンテレヅジョに行ってみたく強く思う。

モンテレヅジョ出身の人の手を借りながらようやくたどり着いたのは、何もない山の中の村だった。なぜ、この村から本の販売を生業とする人たちがたくさん出たのか、筆者は聞き込み、調べていく。

そこには何もない。村人は農作業の手伝いの出稼ぎに行き生計を立てていた。ところが1816年、6月に降雪という「夏のない年」が訪れる。農地は全滅、出稼ぎ仕事もなくなった。村人は石や栗を売り歩き、暦やお札を売り歩き、その行商が本の行商となっていった。遠くはフランスやスペインまでも山を越えて行ったという。

当時、書店は専門性が高く値段も高く、庶民には敷居が高かった。行商の本屋になら「こんな本が欲しい」と頼みやすい。次第に市場の需要にも熟知し、買い手からも出版社からも頼りにされる存在となっていく。

1953年、本の露天商賞が設立される。全国の本屋がイチオシの本をあげ、その本の中から1冊選ばれるという。第1回の受賞者はヘミングウェイである。日本の本屋大賞より50年も前に設立されたことに驚かされる。そしてこの「モンテレヅジョ 小さな村の旅する本屋の物語」の著者 内田洋子さんは2020年の金の籠賞を受賞している。

何もない村だからこそ、命をかけた行商ができた。その行商が勇気と本とイタリアの文化を広めた。知識は財産、知識を入手し広めることは未来への投資・・・この村の出身者は本の行商に誇りをもっている。読んでいて本への情熱に胸が熱くなった。

迷いに迷って諦めた2冊がこちら。いずれも昨年の第169回直木賞受賞作品である。

・「極楽征夷大將軍」垣根涼介

私にとってあまり馴染みのない足利尊氏とその弟の直義を主人公に、室町幕府の設立期を描いている。まあ、この尊氏が、驚くほどやる気のないダメダメ人間なのである。しかし、549ページ上下2段組小さめな活字のこの本を最後までぐいぐい読ませていく。はい、おもしろいです。

・「木挽町のあだ打ち」永井紗耶子

これぞ「ザ・小説」である。江戸時代、芝居茶屋の路地で皆が見ている中での仇討ち、しかも作法にのっとって首まで取った。後日その顛末を1人の侍が聞きに来る。ラスト、全ての伏線が回収され、見事である。なぜ「仇討ち」ではなく「あだ打ち」なのか・・・じいんと胸にしみるラストである。

◆【 T 】『川のほとりに立つ者は』

カフェの店長清瀬は、店員達との人間関係や恋人の松木との気持ちのすれ違いなどで思い通りにいかないことが多くイライラする日々を送っていた。ある日、松木が怪我をして意識不明の状態になる。彼の部屋に行きノートを見つけ、彼が隠していた秘密を知ることになる。

ノートを読むことで、いままで不信感を持っていた松木の気持ちや行動が理解できた。また彼の友達岩井樹の苦しみにも気づく。松木の回復を願いながら周囲の人々と関わることで、松木の親友の樹・店員である品川さん・樹の好きな天音さんなどの一人一人の個性に気づく。

小説の最後に、この本の題名について、「川のほとりに立つ者は、水底に沈む石の数を知りえない。」「川自身も知らない石がしずんでいることも・・・。」と書かれている。

人と関わる時、相手を知りたいとかその行動を理解したいと思うが、完全に分かることは難しい。自分自身にも自分のことが分からない時もあるし、昨日の自分と今日の自分とは変化することもある。

でも清瀬は、松木と付き合い、彼の秘密を知り、関わることで、水底の石はそれぞれ違うことを知った。人にはさまざまな事情があり、いろいろなものを抱えながら生きている。そして、一人ひとりみんな違う。自分の尺度で考えて、ここまでできて当たり前というのではなく、関わり合い相手を分かろうとすることが大切だ。

◆【KH】『香君 上 西から来た少女・下 遥かな道』

大好きな上橋菜穂子さんの新作。手にとった第一印象、なんと美しい装丁だろう！背表紙からかぐわしい香りが匂い立つよう。でも、予想に反して、美しい花の香りを司る？女性の話ではなかった。

植物は、害虫に襲われると、虫の嫌がる物質を出すという話を、どこかで読んだことがある。植物の香りを、植物の発する“声”として感じ取る能力のある少女アイシャが主人公だ。そして本来、当然その特別な能力を備え、ウマール帝国を司る象徴であるべき香君オリエとアイシャの立場を超えた心の交流に心が洗われる。特異な能力を持ちながらも、神でも、光君でもない、少女アイシャが、自らの一族の敵であるウマールの民を守るべく立ち上がる姿は感動的だ。最後まで息をつかせぬ物語の展開。是非、手にとって楽しんでいただきたい。

○おまけのおすすめ本『昆虫絶滅』オリヴァー・ミルマン/中里京子 訳 早川書房
ショッキングな題名。聞いたことはある遺伝子操作、なんとなく気持ち悪いくらいの意識しかなかったが、地球に住む生き物の一員である人間として、ほかの生き物（植物、昆虫、動物、微生物。。）を人の都合のいいように作り変えたり、人の活動が結果として、他の生き物を絶滅に追い込んでいる現実。人が思うがままに、他の生き物を操ることは、とても不敬だという思いを強くした。『香君』に出会わなければ、絶対手に取らなかった1冊。

◆【K子】『小説伊勢物語 業平』

伊勢物語と聞くと多くの方は学生時代の古典の授業を思い出すのでは…古典と聞くと当

時は「コテン」と寝るが代名詞でした。伊勢物語の中で今も記憶にあるのが「東下り」の中の杜若の個所 例のかきつばたと黒板に書かれたチョークの字が今も浮かびます。

小説とついで「伊勢物語」です。業平様の素晴らしきこと エロイだの、色々の道しかないように言われてきていますが… 今回改めて恋愛や結婚に関するさまざまな事件・母子の愛情・旅のさびしさ・人の身の上のかなしさ・等の話を125段(業平15歳初冠)(56歳ぐらいのついにゆく)を一本の筋のある小説に仕立てた作者の力量に感服です。多分人気 No.1 の段は69段だと思います。思い人恬子が伊勢神宮の斎宮となったのです。その斎宮と思いを果すのです。まさに小説の炎上場面です。後年子どもとも会うのです。斎宮との間に子どもをもうけたナンテ想像できますか？ 平安の時代しかも伊勢神宮の…これは業平の恬子に対する思いの深さ、いやこの時代の女性の強さいや一歩踏み出させた作者の意志の表れかと思いました。もう一段推しは「芥川」です。原文は「露ときえなましものを」が思い人高子が国母となって後々まで業平と縁をつないでいるのです。

この本を手にとってみて下さい。表紙の格調高さ(メタボですが)行間から香りが漂ってきます。(伽羅か白檀かな?)活字しか真似の出来ないことが無数に有ります。何よりも業平が和歌の道にとともすぐれていたという事です。当時は漢詩・漢文が主流でしたのに。

現在山のように出版されている「伊勢物語」高樹のぶ子さんの「業平」は「事実は小説よりも奇なり」と言うことがあります。面白さに万歳。

◆【 SM 】『小説伊勢物語 業平』

高樹のぶ子さんが 在原業平を「雅」な男と創り上げ、業平が藤原高子に向けた「誠を尽くす光」と 高子が業平に「誠を尽くす光」が 交差し閃光があたり一面を照らす。一方、業平が恬子内親王に向けた「誠を尽くす光」と 恬子が業平に向けた「誠を尽くす光」が交差し閃光があたり一面を照らす。何という世界だろう！ 感動で体中に 鳥肌が立っている。この高樹のぶ子の世界を「文学」と呼ばなくて何と言う。

今生で高樹のぶ子という作家に出会えたことに感謝。

業平と高子の恋に 乾杯！ 業平と恬子の恋に 乾杯！ 高樹のぶ子の才能に 乾杯！
そして 高樹のぶ子の才能をいち早く紹介して下さった吉川五百枝先生に 乾杯！

◆【 望月悦子 】『はみだしの人類学』

この本を読みたいと惹かれたのは題名です。「はみだし」とは？「はみ出す」は、決められた枠や境界から、外部的な要因によって超えて出るという意味合いの言葉です。しかし「はみだし人類学」ではなく「はみだしの人類学」の「の」がどうも意味があるように思えました。文化人類学は、19世紀末から20世紀前半にかけてヨーロッパやアメリカで確立された学問のようで、大航海時代を経て、西洋諸国がアジアやアフリカなどを植民地にするようにな

った時代に生まれ、そこから人類に見られた多様な異文化や差異それらの構築などを考える学問のようです。文化人類学者である著者は、無数の異なる「わたし」が生きる世界で、この本の帯に「わたし」と「あなた」のつながりをとらえ直す。「違い」を乗り越えて生きやすくなる技法とは。複数の「私」を生きる人類学的思考のすすめ」と示し「わたし」や「あなた」が共に生きるための鍵となるのが「つながり」と「はみだし」だと主張しています。世界中で起きている(きた)紛争や暴力は選択の余地のない単一の線引き、例えば「テロとの戦い」「反米」「反イスラム」などのようにひとくりにされた「わたしたち」が暴力へと扇動・動員されてしまうのだと主張しています。本当にそうだと納得できます。固定概念に囚われずに、差異を見つけてはみ出してみる、そこから新しいつながりが生まれてくる。そのためにはやわらかい「わたし」の思考力が求められる。と著者は言います。その過程には「共感」「共鳴」を必要とされ、進み方も「直線」「曲線」があってもよいのだと。文化人類学的な知の技法の鍵を「つながり」をベースにひとつの見方よりも、複数の見方を手にした方が「わたし」も「わたしたち」も生きやすくなるのだと主張しています。この複数の見方を「はみだし」だと著者は主張しているのだと理解しました。面白いのは「はみだし」を「溶けたり」とか「開かれたり」と表現している言葉です。

最後に著者は「わたし」の枠組みに自分を押し込めるのではなく、他者との境界を越えた交わりに「わたし」に開かれるような営みです。これがあたりまえだ、この考え方が正しいといった、固定的な「わたし」へのこだわりが他者との出会いによって覆させる。そして、また新たな「わたし」の輪郭を手探りで見つけ出そうともがく。その変化する景色を「おもしろい」と好奇心にかられるまま歩んだ曲がりくねった道のりが、私の文化人類学だったような気がします」と人類学者は述懐しています。

今、わたしたちが総合読書会で取り組んでいる教育学者の太田堯先生、生命科学者中村桂子先生も「ちがう・かかわる・かわる」を主張しています。人類学も生命科学も教育学もそれぞれの視点から同じことを力説しているのが面白いし共感できます。

この本は106ページの割に大きな字で大変読みやすい内容でお勧めです。

◆【 MM 】『本屋で待つ』

広島県の北東部にある「ウィー東城店」。この店がどのような変貌をとげてきたのか、成功話だけではないそれまでの道のり。お店を利用する人たちとの信頼関係、このお店で働く人はどんな人なのか。一冊にいろんな要素が含まれていて「〇〇な本です」と一言では言い表せない。

この本を読んでいて感じたのは小さなことかもしれないことを見過ごさない、小さなことの積み重ねが繋がっていくということ。そして人にとって大切なのは居場所があるということ。

ウィー東城店を利用する人は「ここならなんとかしてくれる」と思っている。年賀状の印刷、本以外の相談…。そこまでの信頼を得られたのも小さいと思えることを見過ごさなかったからではないだろうか。「うちはやってないんですよ」「それならここに問い合わせてください」と流すのではなく動く。本文にあったような「困っている人に黙って寄り添えるような人間になりたい」という思いと行動の積み重ねが信頼につながっていったのだろう。

読書会でこの本を紹介したとき、実際にこのお店を利用しているし信頼しているという参加者がいた。取り寄せが難しいと思っていた本も入手することができた。その人も「あそこならやってくれる」と言っていた。読んでいた本と現実がつながって不思議な感覚がしたし、本に携わる仕事をしてきた一人の人としてお客さんの要望にできる限り対応しようとする情熱に感動した。

書店にしても他の小売にしても大型店が進出してくれば個人の店舗は影響を受ける。しかしその店を選んで行く客がいる。私も町の書店が好きな一人だ。どうしてだろう。売り手の顔が見えるからかしら。書店ならば店に置いてある本。限られたスペースだからこそ店の個性が見える。並べている本につけている POP、地域に関する本…。本を買いに行くだけの時もあれば買った後の話が長くなることもある。疲れたりざわついた心をリセットしに寄っているところもある。本も好きだがやはり店を作っている人たちの雰囲気もいいのだろうなあと思う。

居場所といえば、この本には書店で実際に働いている人の話も載っている。お客さんの居場所でもあるし、従業員の居場所でもある。その人がどうしてここで働くことになったのかそれぞれドラマがある。だけどきっかけは発したひとことや一步の行動からだ。そこから始まって今につながり先へもつながる。私も今できることを続けていけばやりたいこと、やるべきことにつながるだろう。そのチャンスが来た時には迷わず飛べるようにしておきたい。